

「一流」のお話

平成 29 年度のスタートです。「校長室便り ♪シンフォニー♪ (響きあうところ)」も第 6 号となりました。平成 28 年度の 1 学期終業式の日(に)に学校に来られないことが発端となり、校長講話がわりに発行したわけですが、以来、始業式・終業式のたびに発行し、第 6 号となったわけです。皆さんには、「やがて」「大樹」となってほしい。シンフォニーは、将来の大樹である皆さんへの私からのメッセージです。バックナンバーは、本校ホームページに掲載されていますので、折に触れて読み返していただければ幸いです。

発行日	号	タイトル
平成 28 年 7 月 25 日 (月)	第 1 号	思考、試行、シコウ、そして自学力
平成 28 年 8 月 26 日 (金)	第 2 号	克己とゲーム
平成 28 年 12 月 22 日 (木)	第 3 号	G R I T (やり抜く力)
平成 29 年 1 月 10 日 (火)	第 4 号	G R I T (やり抜く力) II
平成 29 年 1 月 10 日 (火)	第 5 号	港北スピリット

さて、本日も、「一流」のお話です。皆さんには、無限の可能性があるわけですから、そういう皆さんに、将来の「一流」「大樹」「大器」を求めるのは当然のことですが、私に一番ぴったりくる言葉は、「一流」です。「一流」、これは、私の高校 3 年生のときの担任の先生の口癖でした。

私の母校・川崎高校(以下「川高」という。)は、1927 年(昭和 2 年)の創立です。当時と今では、学校制度が違っており、神奈川県で 8 校目の旧制県立中学校として創立されました。まあ、進学校なわけです。この私の母校の歴史のターニングポイントは、1969 年(昭和 44 年)に始まった学園紛争(川高紛争)です。学園紛争の中心は大学なわけですが、川高だけでなく、高校でも紛争を起こした学校はあります。ただ、他校(高校)の紛争と川高紛争の決定的な違いは、収束までに要した時間です。長期化した川高紛争は、それまでの進学校・川崎高校のあり方を変えることで収束しました。

私の川高入学は、1976 年(昭和 51 年)です。紛争から 7 年後です。既に偏差値では、僅差で多摩高校に抜かれていましたが、私の住まいは、川崎大師であり、近くの川崎高校より遠く(の)多摩高校を勧めるほどの差を中学校の先生は認めず、「布川はしっかりしているから、わざわざ多摩高校に行く必要はない。川高に行けば、友人関係も変わり、勉強に専念できる」とアドバイスされました。しかし、残念ながら、私はしっかりしておらず、川高でも勉強家ではない方々と親しくなり、中学校時代の仲間との交友も続き、予定とは全く違う方向に行ってしまいました。

1976 年の川高の先生方には、紛争後の川高のあり方を是とする方、非とする方、様々でした。私の高校 3 年のときの担任の先生はというと、「紛争後の川高

のあり方の『精神』を是としながらも、『現実』がそうになっていないことを問題とし、なんとか川高の学力水準を維持しなければならない」そんな考えであったかと思います。

進路希望が決まらない生徒に、「とりあえず大学に行け」という言い方がありました。今もあるのかもしれませんが、あまり聞きません。とりあえず、大学に行かせるほどの経済的余裕はないからです。高度経済成長は、1955年～1973年。1976年は、まだまだ高度経済成長の価値観に縛られています。「いい大学に行き、いい会社に入り、いい暮らしをする」「勉強するといいいことがある」ということです。そんな考え方と「とりあえず大学に行け」はつながっているわけです。

しかし、私の担任の先生は、「とりあえず大学に行け」とは言いません。「何になる」のかを突きつけます。求めます。答に窮して、この先生の追求から逃れるために、とにかく急場しのぎに答えると、「おお、そうか。よし、一流になれ」と返ってきて、さらに、「一流になるにはどうしたらいい」となって、先生のしつこい指導から逃れるために答えたけれど、終わらない。一流への道が始まるわけです。「一流の大工になるには」、「一流の料理人になるには」、「一流の美容師になるには」、「一流の役者になるには」 「一流の…になるには」 …。

「とりあえず大学に行け」タイプの先生が否定するような進路を一切否定しない。そのかわり、「一流」を求める。「一流」を求められた生徒が出した答えの多くは、「大学に行く」ことでした。どんな職業であれ、「一流」になるためには、「豊かな教養」と「深い専門」が必要だからです。（「広い教養」ではありません。「広い」と言ったときの「教養」は「知識」と同義です。「豊かな」と言ったときの「教養」は「人間性」と同義です。）結局、あの先生の「一流になれ」は、究極の「大学に行け」だったのだと思っています。

大学に行かずに一流になった者もいます。専門学校に進み、そこで初めて猛勉強をし、専門学校に教えに来ていた某大学の先生に認められ、弟子入りし、人生が開けた人。自衛隊に入り、やはり猛勉強をし、ありとあらゆる資格を取得して、アメリカの航空会社に転職した人。結局、皆、猛勉強したのです。

「いい大学に行き、いい会社に入り、いい暮らしをする」「勉強するといいいことがある」という時代は、終わりました。しかし、私のまわりには、勉強をした結果、いいことがあった人たちがたくさんいます。デジタル式の知識を詰め込む勉強ではなく、「一流になる」ために、「豊かな教養」と「深い専門」を身につければ、必ず「いいこと」があります。

そして、時代は正にアクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）です。デジタル式の知識では駄目だという実社会からの要請が大学に突きつけられています。大学が変わる、大学入試が変わる。なので、高校は変わらざるを得ません。港北高校は逸早く変わり、変わり続けます。「勉強するといいいことがある」の復権です。だから、自学力（課題を発見し解決するために必要な「自ら主体的に学び続ける力」）なのです。だから、港北スピリット（何事にも明るく素直で前向きに。自分で考え、最後までやり遂げる。）なのです。

勉強の質が変わりました。だから、努力は嘘をつきません。やり抜いて、やり抜いて、「一流」になってください。